

# 下前津遺跡考

和田 英雄

## 1

ここで述べる下前津遺跡とは、名古屋城から熱田神宮に至る標高 10m 以上の熱田台地東側縁の旧町名、春日町、不二見町、下前津町に及ぶ範囲の遺跡である。

筆者の下前津遺跡に対する興味は、昭和 38 年 12 月、名古屋市中区春日町 75 番地(現在は上前津二丁目 11 番地)の工事現場において弥生時代後期の春日町遺跡を発見したときと同じく、この地にも高蔵遺跡と同じ規模の遺跡の存在にむけられていたところであるが、1965 年 3 月からの地下鉄工事及び周辺の都市再開発工事において縄文時代晩期、弥生時代中期～後期、奈良・平安時代および近代に及ぶ遺物が出土し複合遺跡としての存在が明白となった。しかし発掘調査は行われたことがなく性格は解明することができなかった。

ところが 1983 年から主に名古屋市教育委員会による 6 次に見捨てられなかった遺跡の発掘調査が実施されるようになり、特に 7 次の富士見町遺跡発掘調査(注 1)による知見と見捨てられた地域から「拾った」土器について私なりの方法により簡単に素描することにより整理してみた。

## 2



第 1 図

富士見町遺跡第 7 次発掘調査は、春日町遺跡の西方 80 m の名古屋市中区上前津二丁目 808 番地において個人住宅建築のため 2006 年 10 月 27 日～11 月 17 日までの間、面積約 150 m<sup>2</sup> の範囲において実施された。第 1 図◎が 富士見町遺跡 (7 次) であり、1・2 は 春日町遺跡、3 は 不二見町地内の地下鉄工事中に始めて貝田町式期土器及び石斧を「拾った」場所である。

昭和 41 年の新聞は、下前津町地内における完形土器の出土を報じることがあったが、遺跡の破壊を大々的に報じることは無かった。下前津遺跡は見捨てられていた遺跡である。

見捨てられなかった遺跡、富士見町遺跡 7 次発掘調査により熱田層の地山面、標高 11.1m を測る台地上から方形周溝墓が検出され、溝内下層位から弥生時代後期

前半の山中式期、上層位から弥生時代後期後半の欠山式期の土器が多量に出土した。方形周溝墓は山中式期に構築され欠山式期まで存続していたようであり、山中式期では、壺型土器、高坏型土器、欠山式期では、壺型土器、甕型土器などがあるという。

また別の方形周溝墓の一端の溝も検出され高蔵式期の土器片も出土しているが、遺構の時期との関連は明確でないようである。（注1）

### 3

下前津遺跡における縄文時代から弥生時代の各形式による遺跡存続期間については明らかにすることはできないが、人間の営為の始まり及び存続については、工事現場において「拾った」土器の外見上の類似性から求めるならば、縄文時代晩期中頃に求めることができる。弥生時代にあつては貝田町式期、高蔵式期、山中式期、欠山式期まで存続することが明らかになった。

縄文時代にあつては、下前津町地内の混貝土層下黒土層から採取した当時、寺津式だと話題になった第2図1のほか、ふくらみを示す口縁部外面に半載竹管による波文を施す雷式の特徴を保つ3、形式の残存が推定できる2が出土しているが、これらは増子康眞氏が馬見塚資料により設定された西之山式あるいは稻荷山式に関連する縄文晩期中頃の時期と考えている。（注2）

弥生時代中期になると下前津町地内では貝田町式期の厚い貝塚が形成され、貝層中から第3図に示した甕型土器がまとまって出土する。名古屋台地では数少ない貝田町式期の遺跡である。貝田町式期土器は地下鉄工事中に、春日町、不二見町、下前津町から出土し、この地に大規模集落の存在を考える。

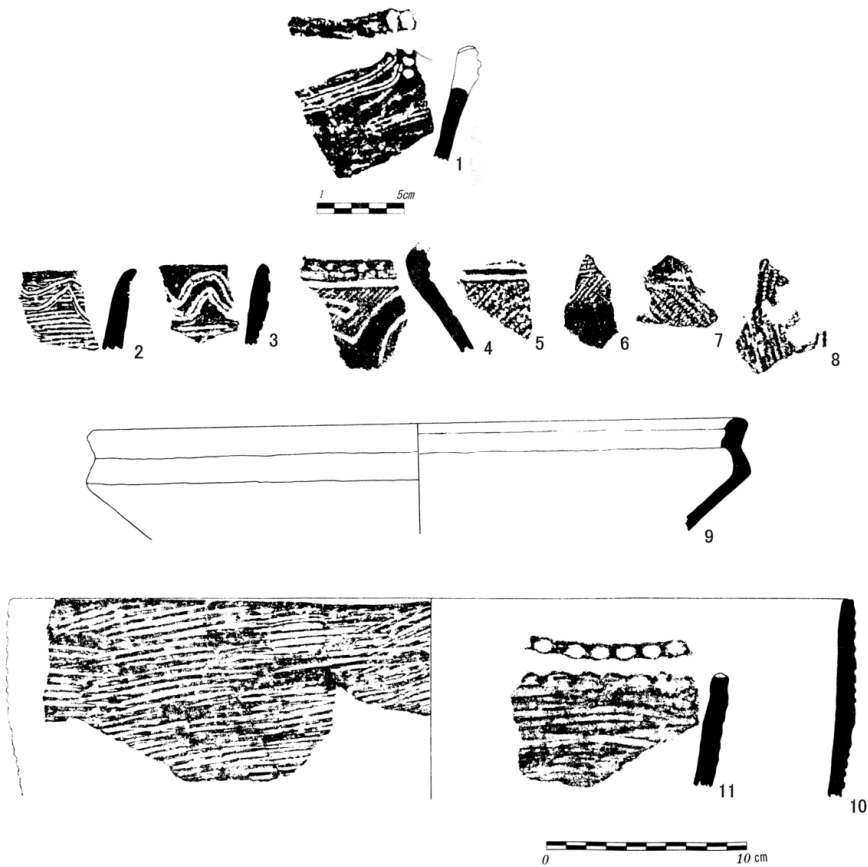
弥生時代中期末、後期になると下前津町地内から第4図に示した高蔵式期の凹線文の施された壺型及び高坏型土器、円窓付土器、口縁部が外側に板状に突き出る高坏型土器、口縁部が鋭く外反する甕型土器および山中式期の土器が出土する。

後期、終末期になると春日町地内から第5図に示した山中式期及び欠山式期並びに3町にまたがり古墳時代の土器が出土する。

下前津遺跡再考にあたり春日町遺跡の土器について改めて第5図に示したが、春日町遺跡の焼成の良好な土器は、いつの時代に台地上の遺跡から流入したのかと考えたことがあったが、高坏型土器、器台型土器の出土が多いこと、また7次調査の知見により稲作に関する祭祀儀礼の場所ではないか、緩斜面、標高約7mの辺りが水田跡ではないかと推定していた。

しかし、1985年富士見町遺跡発掘調査（注3）で層位中の花粉分析の結果、水田跡を推定するための傍証が得られなかった。私は、拙著「春日町遺跡」で工事中に地下水の湧水

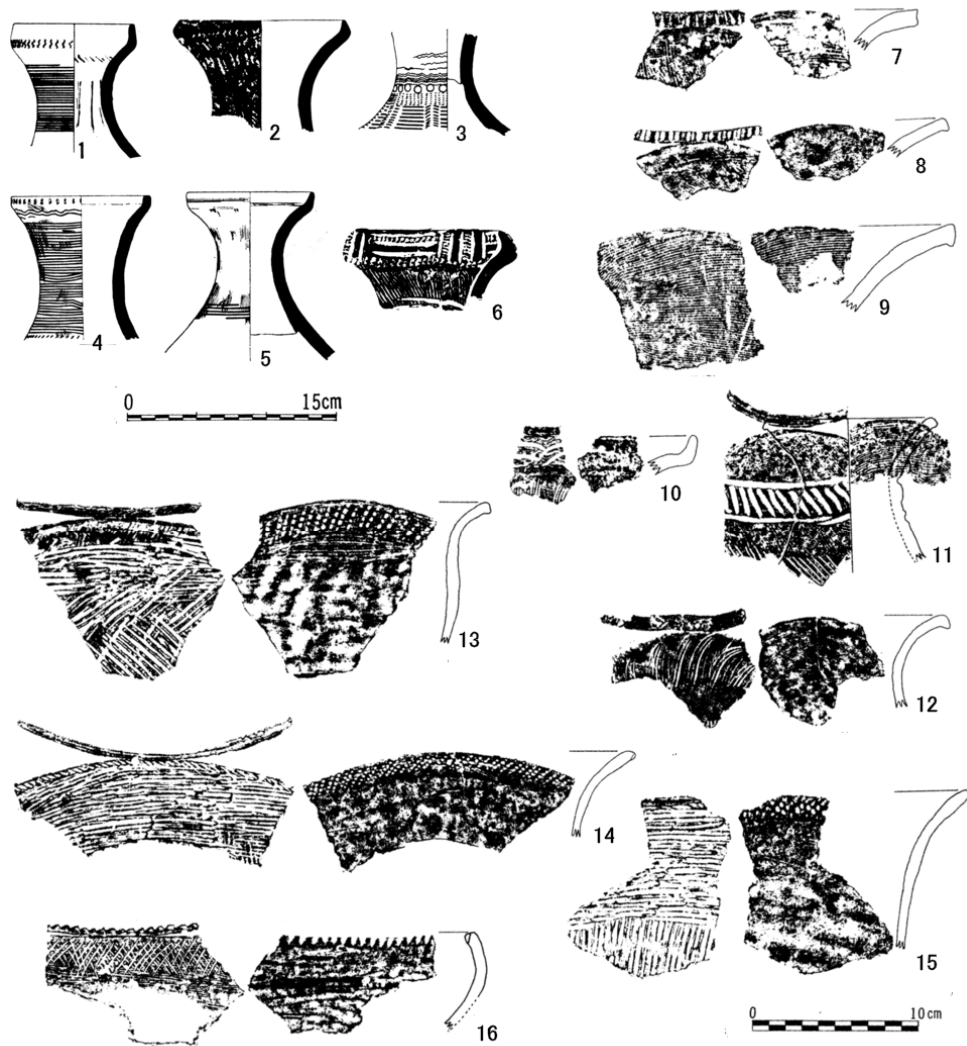
を観察しているのので、谷口、傾斜地を耕地として利用する形態をとることが妥当であろうと述べたところ、東北のM氏から東面に広がる沖積地を水田として利用することが妥当であると批判されたことがあった。未だ下前津遺跡の谷口、傾斜地の耕地利用、水田跡の確証がない。



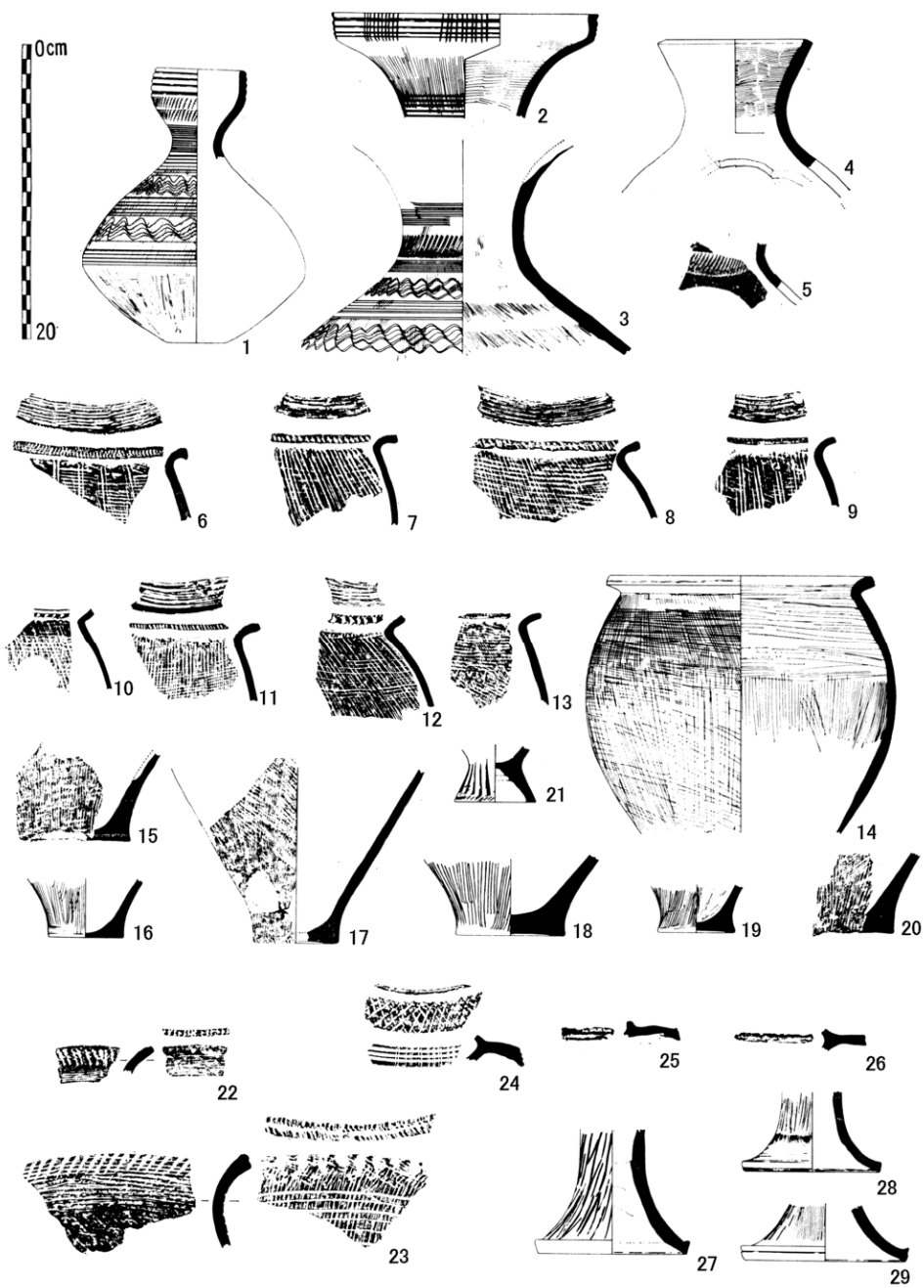
第2図

春日町遺跡からは、第5図1、口縁部内面に段を設けないパレススタイル土器の出土があるが下前津町地内からは、第5図8～13に示した口縁部内面に段を設けるパレススタイル土器の出土もある。パレススタイル壺の口頸部の形態及び胴部文様のあり方からの類別例があるが（注4）、これら土器を作り始めた遺跡は明らかにされていない。下前津遺跡からは、内面に段を設けないパレススタイル土器と段を設けるパレススタイル土器が出土する。

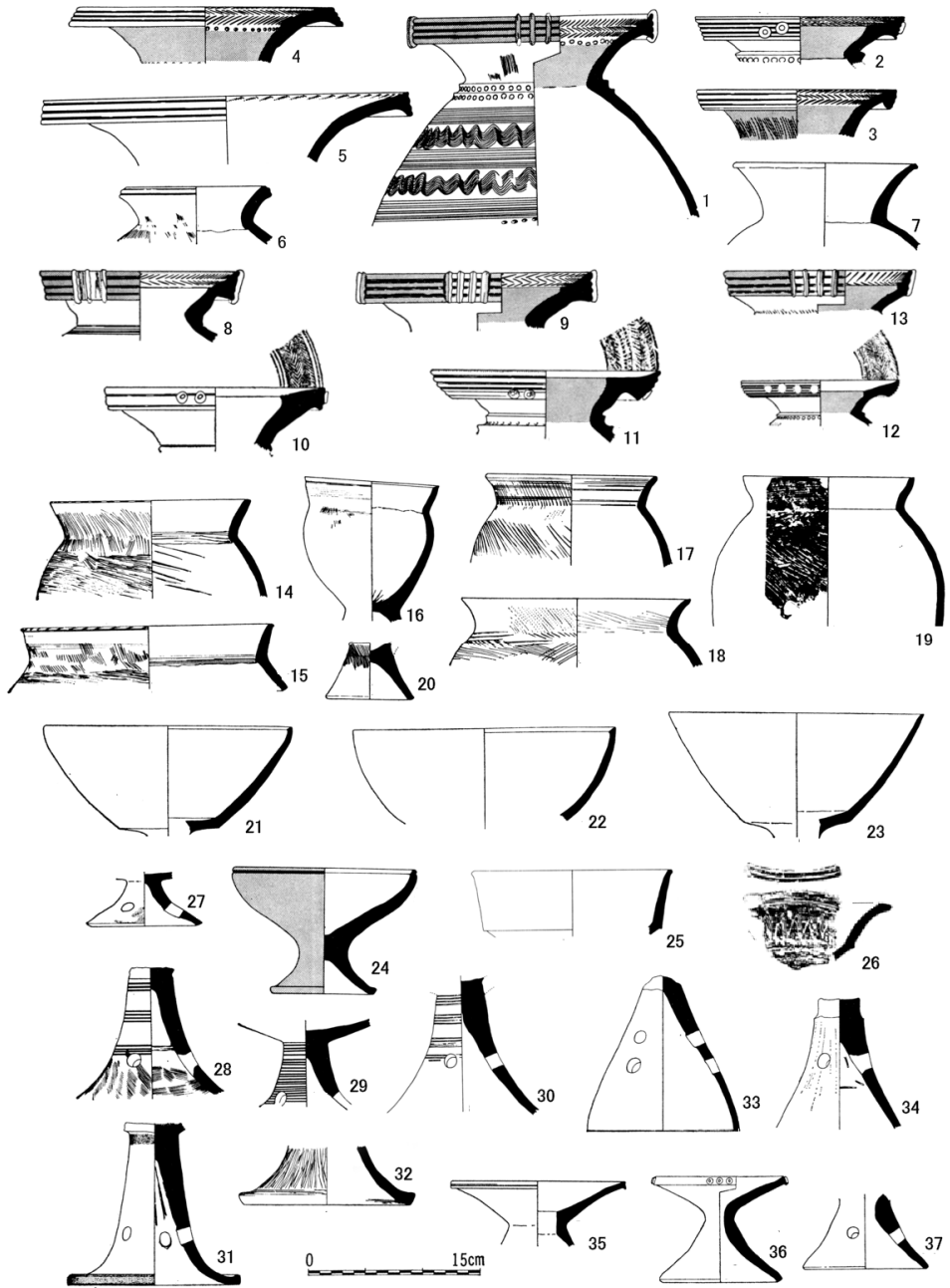
なお本稿において用いた土器形式による時期区分の名称は、縄文時代にあつては、昭和40年代における紅村弘および増子康眞両氏による直接間接いろいろの御教示のほか、弥生時代にあつては、愛知県史資料編2に拠ることとした。(注5) また4枚の図(2図~5図)に示した土器は、冒頭で述べたとおり、私なりの方法により簡単に素描することにより整理してのものであり、中には他人の空似土器もあるかもしれない。「拾った土器」を形式ごとに纏めたものでなく単なるカタログである。



第3図



第4图

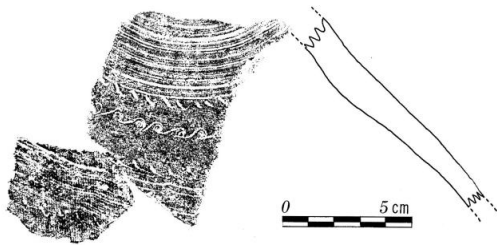


第5图

## 4

名古屋城を北端とする名古屋台地は、西側の熱田台地と東側に瑞穂台地の間の低地を囲むように遺跡が存在する。下前津遺跡も、そのひとつであるが、同じ熱田台地に位置する高蔵遺跡は、弥生時代前期から存続する地域の中心となる拠点的な集落として位置づけられている。

近年、弥生の拠点集落として位置づけられる遺跡が明らかになってきているが、拠点集落の目安については、弥生前期の土器が出土し規模が大きい、遺構が多い、遺物が多く出土する、長期間継続する、環濠、貝層、特殊な遺物・遺構などが挙げられているが(注6)、下前津遺跡は、これら条件を満たしてはいない。しかし富士見遺跡発掘調査(7次)により



第6図

方形周溝墓を作れる人がいたこと、また下前津町地内から瑞穂区軍水町出土、辰馬考古資料館蔵、中根銅鐸の連続渦巻き文に類似する文様が施された土器を用いた人が住んでいたことが明らかになっており、この地は縄文晩期中頃から居住が始まり、貝田町期に定住が始まり弥生時代中期から古墳時代に至り、古渡城の築城まで人々が居住することができた「拠点地」であったと考える。

下前津遺跡においては、標高10メートルの台地上から完形土器が出土し、斜面から破片が出土する。拠点地で経験と営為、言い換えれば地域の生活史が下前津遺跡となった。

私は考古学を職業としていない未熟者である。下前津遺跡については、毎年、少しずつ問題の焦点を変えながら、想定される多くの訂正を加えながら再考していくこととしたい。

## 文献

- 1 瀬藤 茂 「埋蔵文化財調査報告書55 富士見町遺跡(7次)」2007 名古屋市教育委員会
- 2 増子康眞 「尾張平野における縄文晩期後半土器の編年的研究」古代学研究40 1965年
- 3 山田紘一 中区大井町所在「富士見町遺跡発掘調査概要報告書」1985 富士見町遺跡調査会
- 4 浅井和宏 「パレススタイル」『欠山式土器とその前後』愛知考古学談話会 1986年11月1日
- 5 宮腰健司 愛知県史 資料編2 考古2 弥生 愛知県 平成15年3月31日
- 6 宮腰健司 濃尾平野と名古屋台地の弥生集落 愛知県埋蔵文化財センター 2011年12月10日